

市民が動物を持ち寄った

円山動物園

動物たちとの出会いだけでなく、仲間や家族との楽しい思い出を与えてくれる円山動物園。平成十二年で開園五十周年を迎えたこの動物園の歴史を振り返ります。

円山動物園は、戦後間もない昭和二十六年五月五日の子どもの日に開園しました。札幌市円山児童遊園として始まり、この年の九月には札幌市円山動物園と改称しています。

開園のきっかけは、二十五年に札幌市が上野動物園から移動動物園を招いたことです。この会場となった円山坂下グラウンドと、円山公園一帯は空前の人出でにぎわったそうです。

このとき、子供たちの明るい夢を育てる教育の場として、また市民の憩いの場として、動物園の開設が必要と考えられるようになったのです。

スタート時に飼育展示されていた動物はわずか三種四点。購入したヒグマ二頭、稚内市から寄贈され



円山動物園で動物とふれあう子供たち
(昭和27年撮影)
(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)

たエゾシカ、そして厚田の望来村で小学生が捕獲したというオオワシでした。このオオワシは「バーサ」と名付けられ、同園のシンボリックな動物として飼育されていました(平成十三年五月に死亡)。

また、雑木林をわずかに切り開いた園内には、仲良し電車と豆自動車がある程度でした。

それにもかかわらず、広場には連日数千の市民が押し寄せ、動物が少ないのを残念に思った多くの市民が、自分で飼っていた動物を寄付したいと申し出ました。こうして寄せられた動物は、クマやキツネ、タヌキ、水鳥など、数カ月で約五十種百点以上になり、関係者も入園者も大喜びでした。



4頭の動物で開園した円山動物園（昭和26年撮影）
（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

これらの動物を収容する動物舎も職員が総出で手作りしたものだったといえます。

このように市民と職員が作り上げてきた円山動物園は、ゾウのリリー（平成十一年死亡）や花子などの人気動物を育ててきたほか、さまざまな行事を開催しながら発展してきました。現在では昆虫類なども含めて約六千点もの動物を飼育しており、多種類のクマの飼育や、オオワシの繁殖に成功するなど、全国的に注目されるようになっていきます。

平成十年には、大画面での動物観察やインターネットを体験できる高度な機能を備えた動物園センターもオープン。十二年の九月には、自然に近い環境でチンパンジーを観察できる新動物館も完成しました。

五十年間に延べ四千万人もの入園者が訪れた円山動物園。今後も一層充実し、私たちを楽しませてくれることでしょう。

（平成十二年六月号・第六十八回）